

## Seeking for knowledge and wisdom

夫 明美

この冬は大変寒さが厳しく、大阪でも気温が一桁の日が珍しくありませんでした。いつの間にか天気予報で 0℃近い予想気温を見ても驚かなくなりました。まだ寒暖の差は多少残っていますが、木々や草花を見ても春が近づいていることが分かりますし、新しい季節が訪れるのが楽しみでもあります。

学校関係者にとって、春は別れと出会いの季節です。晴れやかな顔をした卒業生を送り出してまもなく、新生活への期待に胸を膨らませた新入生を迎えます。2011 年度をふり返り、個人的な回想ですが、自分自身の研究・教育活動において転機を迎えたように思います。まずは、単純に就職して 10 年が過ぎたという数字上の節目です。10 年前に住み慣れた大阪を離れて初めての土地へ移ったこと、そこから数回の移動を経て再び大阪にもどってきたこと、その間の数々の出会いと別れに思いをはせた 1 年でした。また、かつての論文指導学生や留学時代の恩師と再会した際に色々なお話をし、自分のこれまでとこれからを見つめる機会になったように思います。以下にそれぞれのエピソードを紹介させていただきたいと思います。これらは 2011 年度初めに外部講師の先生のご講演でうかがった「知識と知恵の両立」という言葉に集約されるかと思えます。

所属学会でかつての論文指導学生と再会した際、懐かしい話に花が咲きました。現在は新進気鋭の研究者として活躍している方から、「先生はずいぶん厳しかった」という言葉が出ました。自分ではそれほど厳しく接している意識はなかったのですが、具体的なエピソードが出るにつれ、「なるほど、それは厳しいですね。」という共通の見解にいたりしました。自分なりにふり返ってみると、留学からもどり、キャリアをスタートさせたばかりの私にとって初めての論文指導生であったので、「自分の持つ限りの知識で指導したい」という自分中心の視点に立っていたように思います。

また、かつて留学時代にお世話になった恩師と再会した際には、「今後のキャリア」ということで貴重なお話をうかがうことができました。私が指導いただいていたころの先生の年齢に近づきつつある私に、「時代と時代をつなぐ役目として、次世代に何が伝えられるか」を意識させてくださるきっかけとなりました。もちろん、自分が個人として研究に尽力して、知識を蓄積することが前提であることは言うまでもありませんが、それを大きな時間の流れのなかで、今後の研究・教育にどのように役立てるかという、「俯瞰的な視点」を付加してくれました。また、現在の先生のお姿から、幸運にも今後のお手本を示していただいていることから、「本や論文だけでは得ることが難しい知恵」を得ることの重要性についても大いに感じさせられました。

2011 年度は、知識をつむと同時に、経験を重ねて知恵を得ることの意義を感じた 1 年でした。これから新生活に入る学生のみなさんには、目の前の課題に一生懸命取り組み、時には失敗をしながらも、時間と経験を積み重ねることで失敗が自分の知恵となりえることがあることを忘れないでほしいと思います。また、時には書物を超えて、自分の身近なところから年長者や歴史と対話することで、年代や時代を超えて享受される知恵についても知る機会をもってほしいと思います。